

1924年 (大正13年) [20歳]

「辰雄日誌1924」No. 4 (1)

—— 1924年1月1日～2月29日 ——

小池辰雄

「基督の復活」 6月1日

「¹⁶それ神はその獨子を賜ふほどに世を愛し給へり、すべて彼を信する者の亡びずして、永遠の生命を得んためなり。」(ヨハネ3・16)

○1924年1月1日 (火)

晴天。1924年の第1日は静かに明けた。起床8時。真先にしたことは国旗の掲揚であった。冷水摩擦。洗面。お神棚と仏様へお灯明をかけた。それから餅焼をやった。大杯になみなみと濺いだおとそを全部かたむけた。実に素敵であった。おめでたいという気分一杯であった。お雑煮、大好きなお雑煮は之を5杯戴いた。満腹した。斎藤様に御年始に上った。

今年はお床間のお飾りはしたが、門松その他のお飾りは一切廃止した。かかる家が多い。また年賀郵便は全然(僕は)廃止した。年賀郵便も一般に余程廃せられた。よいことである。虚礼なんかやるのは無意義である上に、お互いに迷惑煩雑である。

尾田先生へ御年始に上った。それからお墓へ行った。兄上の墓前では久しくお祈りしなければならなかった。何ものかがつきこまれた。帰宅、そこへ、宇都宮へ一旦帰られた兄上がまた帰って来られた。晚餐は一家5人(赤ちゃんも)揃って戴いた。静かな元日はかくして暮れ行った。羽子つく音はよく聞こえた。女の子が多い様である。かるたの声はしなかった。武田の叔母様と宣ちゃんが新年賀に今朝見えた。山本の兄上も見えた。

○1924年1月2日 (水)

快晴。起床8時。10時に出掛けて山本へ行った。義雄さん、隆さんにトンビ紙鳶を買ってやり、野原で上げてやった。二人は大喜びであった。好い、仕初めをした。昔の気分になった。彼等の喜ぶ無邪気な顔を見て、嘗て紙鳶を上げて嬉しがったときが思い出されて昔も懐かしく思われた。ジェネレーションはかくして次から次へと送られて行く。

お昼の御馳走になって4時頃、中野を辞して来た。市ヶ谷見付へ下車したときに丁度、日没であった。美しい夕暁が見られた。母上は今晚、武田へお宿りである。兄上と5時半頃、おふろへ入りに行った。共にオリオン座を仰ぎ見て、嘗て北京の兄上とオリオン座を見し



ことを思い出して感慨無量であった。

我が一人の実兄よ、ねがわくは我と共に勇みて人生を相共に歩み行かん。そして、天に待つ兄上とやがては、三人で昔日の如く語らん。永久に。慕うところは天に在り。我等一家のもの共は、彼の国にして永遠に共に居らん。

僕はよく今日まで生きて居た。本当によく生きて居た。神様は僕に未だ未だこの世に於ける生命を与え給うのである。而るに顧みよ、僕は自分で自分の身体を害していた。自分で自分の身体の骨を瘦せしめ、肉を削いでいた。而して今日まで生きて来た。

神様は、この罪人のこの仕業を今日、この日まで、見遁し給うて、生命を与えて居られた。何たることぞ。僕のこの深き罪に對してまでも、この身を棄て給わないでまだ生命を与えつつ居られる。僕は神に帰らねばならない。本当に帰らねばならない。神様は僕に生命の力を与えて居られる。僕が神に帰れば、僕の靈魂が神に帰れば、神様はそれに従つて、僕に立派な健康体を与え給う。僕の身体は物質上からは如何に方法をつくすとも救われない。

内なる歴史が甦つて目覚めて神に帰つて、しっかりと初めて僕の身体は神の喜び給うものとなる。この有難きお恵みを受けなければいけない。恩恵を享けよ。今までは恩恵を自ら拒絶していた。そして神様の御心でないことのみしていた。

ああ、神様どうかお赦し下さい。神様の辰雄に垂れ給うところのお恵みをすべて享け容れる清き、確^{しつ}かりした心を有たしめ給え。この大なるお恵みを総て神様の光榮のために働かしめ給え。アーメン。

大なる罪人^{つみびと}のために十字架^{はりつけ}上に磔^{はりつけ}せられ給いし贖主^{あがないぬし}イエス・クリストの御名によりて聞こしめし給え。アーメン。

神様、どうぞ、強き辰雄に。

光子母上よ、祈り給え。政美兄上よ、祈り給え。龍二兄上よ、祈り給え。

○1924年1月3日 (木)

晴。午前8時半起床。10時、武田へ行く。宣ちゃんのお誕生日のお祝で。青木からは三弦さん、四郎さん、泰ちゃんの3人。皆で5人。それに武田の叔母様。トランプやお話、蓄音機で夜の7時まで遊んで帰った。お昼には鰻井であつたが、叔母様と僕は親子丼を戴いた。美味しかった。お三時のコーヒーが非常に美味しかった。バナナ、リングゴ、カステラと色々御馳走になった。満腹したのは僕の身体のためによくなかった。晩の御飯はお軽く戴いた。入浴して寝た。3日は過ぎた。

宇都宮の兄上が宇都宮へ歸られた。身体の貧弱をつくづく感じた。しかし胃の具合をよくくして、大きな心を持つていれば、神様はその中に大なる恵みを垂れて、健康にして下さるのであるから安心していよう。



○1924年1月4日 (金)

快晴。小春日和とでも言いたい位、温かい日であった。午前は殆ど何すともなく済んだ。午後は三越丸善へ買物に行った。温かくてマントも要らなかった。晚餐は斎藤様におよばれた。美味しかった。トランプをして9時まで遊んだ。アスパラガスを食べたのは生まれて2度目。未だ顔色がよくないと斎藤様に言われた。全く面目ない次第である。

総て自分の不徹底、不信仰の結果である。神の御恵を戴いて、強い辰雄になるぞ。人々よ、強くなる僕を見ていてくれ。

○1924年1月5日 (土)

晴、夕雨、晴。午前10時出掛けて、尾田先生、佐野様へお赤飯を配りに行った。富美子のお宮詣りというわけなのである。四郎君が来て手伝って下さった。午後からは、藤井先生のお家と高島の伯母様の処へ行った。藤井先生はお留守であった。お嬢様に小学校のお子さんにお会いした。高島さんへは、僕から台湾のシャボンを持って行って上げた。渋谷で買って。お夕飯の御馳走になって帰った。チョット雨にあったが電車に乗っている中に霽れて有難った。九段の向山堂に寄って、12月と9月の『聖書の研究』を買った。それからバンヤンの“Holy War”『聖戦』の原書を得て嬉しかった。信仰の生活を一日でもすごしたと思ったときは何とも言えぬ感謝である。

帰宅後、四郎ちゃんと風呂に入りに行く。四郎ちゃんが宿る。静かな晩である。母上と三人で炬燵で話す。高島の伯母様の手づからお編みになった足袋^{たび}のカバーを戴いた。恐縮である。

○1924年1月6日 (日)

晴。午前、散歩。午後、家に静かにしていた。夜、『聖書の研究』を久しぶりで読んで、また内村先生の御講演に接するの感を受けて嬉しかった。『聖書の研究』ほど飲ばしい雑誌はない。……〔英文省略〕……。

10月号と11月号とが手に入らぬは残念である。何日^{いつ}か読みたいものである。佐藤六郎様が来られて愉快に話して行かれた。母上の為^{ため}にまた読書に来て下さるとのことである。

○1924年1月7日 (月)

晴。午前、恩給証書の用で同心町へ行った。帰りに神楽坂の郵便局へ寄った。お昼にお雑煮を戴いた。午後、武田へ宣ちゃんのお見舞に行った。大腸カタルとのこと。少なからず驚いた。飛んだことをされた。お気の毒である。しかし元来が丈夫だから回復も速いことであろう。夕方、実さんが来られた。皆で夕食後、名も知らぬ珍果物を戴いた。美味しいともまずいとも言えない味がした。肉は南瓜の肉の様な色をしている。種子はザクロの



様なのであるが色は黒褐色である。大きさは梨瓜の少し大きい位。

○1924年1月8日 (火)

晴。起床8時。支度を整えて朝飯を戴いたのは10時であつた。母上様と共に。じねんじょうをすったのに卵をかきまぜたのは美味しかった。例によつてあべかわ餅も戴いた。お餅とキナコは少量、水戸へも携帯した。お炬燵で母上様とお話しをして出掛けたのは11時20分頃であつた。新しき希望と確信に満たされて、握手を^{かた}鞦、雄々しく出掛けた。母上様も大層御元気で飲んで下さり、僕も非常に愉快であつた。車中は四郎ちゃんと一緒であつた。水戸駅へ着いて30分ほど待つて自動車 came。桐寮へ着いたのは夕暮であつた。落ち着いて、二人で夕飯を認めたときは全く日は暮れていた。夕飯は、永藤のパンと例のあべかわ餅であつた。空腹のところだったので美味しかった。ハンブル・フィースト〔質素な御馳走〕とでも云おうか。夜は実に実に静かである。弦月と金星の如何に美わしかりしよ。冬の夜の星の如何に美わしきことよ。懐かしき友なるよ。

人生の第21年に棹さす僕、希望に輝く僕、確信に燃ゆる僕、信仰に歩まん僕。聖霊、願わくは僕に宿り給いて御導きあらんことを。

○1924年1月9日 (水)

晴。

「我等の生命なるキリストの現われ給うとき、汝等も之と共に栄光の中に現われん」

カント先生、我が崇拜するカント、未だ彼について何等学ばざれども、彼の敬神を本とせる哲学を聞くに及んでは、如何ほど偉大なるものならんと想像せしめらるる偉大なるカントは僕の机上に現われた。今度、東京で求めて水戸へ伴れて来たものである。机上の絵葉書バサミは、ルーテルあり、リンカーンあり、ホイットマンあり、カントあり、シェイクスピアあり。それは皆、我が救主によりて偉大なり。神を仰ぐが如く偉大なり。友はいずこにても我がもとにあり。我、寂しきことあらず。我、実に乏しきことあらず。

○1924年1月10日 (木)

晴。お午から烈風吹き荒れて寒冷身に凍む。夜に至つて風ぐ。星づく夜、散歩に出る。市場でお餅を一枚買う。48銭。あべかわずきの僕、早速、あべかわを作る。胃の具合がよい。これは心の平安を表わすものである。信仰ありて身体ありである。宣ちゃんにお見舞を書く。高島の伯母様に御手紙をさし上げる。Carlyle's Heroes and Hero Worship「カーライルの『英雄と英雄崇拜』」を読み始める。夜10時をすぎると、森々と寒くなつていく。



○1924年1月11日 (金)

晴。弦月が次第に太つていく。だんだん月明となりいく嬉しき。今朝は実に穏やかな朝だった。筑波の山々、森、畠、灌木林などの風情は画の様である。そこへいつも8時に通る列車の煙が今朝も丁度その時なのでホット切通しの間から浮いてきて何ともいえぬのどけさである。妙景である。日光の連山は白姿皚々である。近くの畠は塩を降り播いた様である。冬の景色は凜としてよい。男性的である。田舎の登校の貴さ、味わいはここにある。高等学校の水戸なりしことを感謝する。現在を喜ぶ。現在に満足する。現在を有効になさんとする。数学、青丸の数に入る。40点代だとのことである。今度がんばってやる。2学期は自業自得である。病気をしたのも自分の仕業、それが大原因となつて勉強にさしつかえ成績に影響を及ぼした。

しかし、いくら躓いても失望しない。それが僕である。光明に向いて猛進する僕に過去はない。失敗はない。後悔はない。ただ、お赦しの請願がある。感謝がある。祈禱がある。忍耐がある。聖戦がある。希望がある。歡喜がある。讚美がある。

光の子たれ。光の子たれ。ああ、我が母上の御名は光子である。母上、誠に光の子で居られる。僕はその光の子の子である。僕も光の子であらねばならぬ。母上を思うと何でも忍ばねばならぬ。やらねばならぬ。僕は、母上のためにする。ああ、賢母のために。

母上よ、母上は誠に賢く在ます。この母上を頂く僕の幸福さはたとえにものなしである。この母上ありて不足は何もないのである。

かの兄上ありて感謝の極みである。ゆたかなるは僕である。エホバを讚美し奉る。栄光、神にあれかし。僕を用いたまえ。御恵を享けさせ給え。

○1924年1月12日 (土)

快晴、暖風。今朝の暖かいこと。初春の感がした。南風である。マントを着ないで登校した。ストーブも要らない位である。12時に学校は退ける。帰宅後、自転車で買物に行く。それから学校へ行つて遊び、寮の風呂に入った。水戸のどの銭湯(みやこ湯をのぞいて)よりも気持がよい。実に好い気持になった。そよ風に吹かれて大運動場を斜断する気持は何ともいえない。夕飯後、蓄音機をかける。読書せんとしたが友達が来たため、一夜を棒にしたのは残念であつた。

御恵を享けよ。忘れろ、棄てろ、Humble、Pureの声が耳朶を打つ。

「エホバはなんぢを守りてもろもろの禍害わざはひをまぬかれしめ並なんぢの靈魂を
まもりたまはん」(詩篇121・7)

静かな夜である。1924年をして御恩寵に溢れしめよ。我が靈魂に、身体に最も御恵と御力の与えられんことを。切に切にお祈り致します。

不信仰は最早我に非ず、不徹底は最早我に非ず、暗黒は我が道に非ず、陰鬱は我に非ず。



光に、光に、光に、光に。希望の年、希望の年、希望の年。
一日一日をして忠実に有効に送らしめて、一年を終らしめ給え。

「¹⁰小事に忠なる者は大事にも忠なり。小事に不忠なる者は大事にも不忠なり。」

(ルカ16・10)

明日はよき安息日を送らしめ給え。アーメン。

○1924年1月13日 (日)

快晴、無風。起床9時。静かな午前。11時、朝昼兼ねての食事。午後、散歩。自転車遠乗り。春の様な日、実に心地がよかった。入浴後、暫し休んでいる中に夕陽西に春く。夕靄立ちこめて四囲煙の様に霞み、夢の国の如くであった。その中に星が輝き出す。月が照り出す。今夜も明星が西に炯々としていた。オライオン〔オリオン座〕が昇って来た。月下を少し逍遙した。常に仰ぎつつ歩いた。この世に居る気がしなかった。宇宙を歩く気がしてその淨化されたこと、我は罪人のあらずとさえ思われた。桐寮の門前に足がとまって、家を見たとき、小さき己れを見た。汚き我を見た。罪の身を感じた。聖書、宗教書に聖安息日の夜を過ごした。消灯、正に12時である。

Fasset eure Seelen mit Geduld. (Lukas xxi-19)

「¹⁹汝らは忍耐によりて其の靈魂を得べし。」(ルカ21・19)

今日の感謝なる兄上の御語として。

○1924年1月14日 (月)

晴、小雨、晴。母上様に御手紙を差し上げた。母上様から御手紙を戴いた。暖かい日であった。元氣よくフットボールをした。入浴して帰って来た。人が遊びに来て勉強を妨げられた。『聖書の研究』『智慧と十字架』を読んで有難かった。

Fasset eure Seelen mit Geduld. (Lukas xxi-19)

○1924年1月15日 (火)

晴。胃が悪くなる。ああ迷える者なる哉。いつまで不徹底なるか。

○1924年1月16日 (水)

晴。地震でまた一騒ぎである。世の騒げること我が心の如し。基督者にして基督者ならざる近頃の己れを如何せん。

○1924年1月17日 (木)

晴。神よ、我、この後もお迷う者ならば赦し給え。我、神によりたのみで、神により



てのみ生きんとする者ならば生かし給え。我が生死は今日を以て境となすが如し。信仰の墮落その極に達せる我に鞭を与え給え。

ああ、十字架を忘れたるか。十字架よ、我が救主よ。ああ、ゆるし給え。ゆるし給え。

○1924年1月18日 (金)

晴。主に近づかんと祈りつつ、忍耐びて、戦いて、『聖書の研究』に力を得て。

○1924年1月19日 (土)

晴。英語の先生が休んで居られるので今日は9時はじまりであつた。1時間おそいと楽である。何と云つても田舎の朝は気分がよい。寒風も吹かば吹けである。栗原先生、本をまちがえて来られる。

「授業をやめましょう」

と皆がニコニコして云う。先生、苦笑いされ

「それじゃあ、やめましょうか」

と云わる。そこでドツと笑つて総立ちとなり

「やめましょう」

ということに一決して、解放された奴隷の如くガヤガヤと室を出た。結局、今日は2時間だけであつた。午後から散歩した。入浴した。ぐずぐずしている中に夜になった。林も四郎ちゃんも芳賀も出掛けた。独り残つた。静かに考えた。机上のルーテルに睥睨された。答えることが出来なかつた。

「汝は基督者か！」

と彼は一喝した。僕は涙を以てよりほかに答えるすべがなかつた。それから、頭を上げて讃美歌を唱い始めた。その中に感極まつて声がふるえて来た。ついに発声出来なくなつて、しなだれてしまった。170番と171番によつてわが霊は蘇生よみがえされた。そしてルーテルを見た。光の眼を以て彼を凝視して、彼の背にかくれたる力の我にも与えられんことを祈つた。

「辰雄！ 辰雄！ しつかりしろ！」

と大キイ兄サンが云われる。大キイ兄サンは生きて僕を守る。

「しつかりします！ しつかりします！」

と僕は答えて、隠れたる力と握手をする。

高島様の伯母様から突然、小包を戴いた。それは手づから編まれたスエッターとカヴァーとであつた。その御親切に感泣するのである。高島の伯母様も言われる、

「身体を大事になさいよ。今でなければ身体を作るときはありませんよ」

と。山本の姉も兄も、吉原の貞ちゃんも叔母様も、母上も兄上も、武田の叔母様も皆が「身体を大切になさい」



と云われる。この弱き自分、これらの人々の御親切な注意に答えるだけの養生をしているか。総ての本が汝の不信仰にある。

安息日が来る。神よ、願わくは、よき安息日を送らしめ給え。兄上よ、守れかし。我、襲がん。

こころを千々にくだきて いのりけるかひの

まことありけりと母をば とくよろこばせよ。

春はのきのあめ 秋にはのつゆ

母はなみだかわくまなく いのるとしらずや。

我が母上を思うとき、僕は真剣の真剣に立かえらねばならぬ。

我が兄上を思うとき、僕は真剣の真剣に立かえらねばならぬ。

母よ、兄よ。僕を、僕を。僕は、僕が。

○1924年1月20日 (日)

晴。よき聖日であった。午前は静かに暮らした。『聖書の研究』と共に。柏木の今井館が思われて、飛んで行けるものなら行きたかった。午後から学校へ、フットボールの仕合を見に行った。第1選手のは1対0、第2選手のは6対0、共に堂々たる大勝であった。敗れて帰る一高軍は気の毒であるが、実力の相違あれほどでは仕方がない。河野の孤軍奮闘も空しく終ったのは気の毒。それから自転車を40分程駆った。小憩後、入浴して帰寮したのは薄暮。穏けき夕である。

この冬ほど暖かい冬は今までにない。雪などは見たくも、ない。氷もなかなか張らない。太陽の黒点が此くまで地球に影響するかと思えば天然の法則の偉大なるに驚くばかりである。地震と云い、気温と云い、天然力の偉大の前には一言もないのは小さい人間の当然の姿である。それを何とか、かとか、天然の偉大を忘れて平常、ベチャベチャとこねくっている人智の小を思うとなさけなくなる。深き処を見て、黙々として崇敬の眼を放つ人が偉大人である。

下り列車が猛然として驀進し行く様は実に男性的であった。ピストンの回転の様と云い、その咆哮と云い、正に快哉三呼に与えた。これを見て、一気呵成に坂を上ったときの愉快さはなかった。自転車の疾走は愉快である。「男は氣」と思った。

明月、煌々。静かに就眠。母上を思う。貴き我が母上に御恵あらんことを切に祈りあげます。

○1924年1月21日 (月)

晴。満月の前日。

辰雄よ、汝は幾度誓いて幾度破りしぞ。

汝は高価な薬を如何ほど購いて、而もその効は一もおさめず水泡に帰せしぞ。

汝は高価な強壯剤を求めて、而も一方にて不節制をなししこと幾度ぞ。



汝は何を食べ、何を呑まんと思ひ煩いて、慾に駆られ、食の奴隷となりて健康を害せしこと幾度なりしぞ。

汝は過食しては悔い、やや良好となりてはまた過食し、また悔いて誓い、また忘るるが如きことをくりえかせしこと幾度たりしぞ。

汝には卵も肉も、ブルトーゼ〔補血強壯剤〕も葡萄酒も皆効なかりき。そは皆一方に不節制、不養生をなせしに基づく。知らずや、

人而無恒不可以作巫医

〔人にして恒^{つね}なければ、以て巫医^{ふい}をすべからず。バランスを失つた人間は神意を伺^{みこ}う巫や医者にかかつてても益がない〕。

汝、馬鹿者よ、目覚めたるか。目覚めよ。時は遅からず。時は今なり。

1924年は汝、復興の年なるを克^よく憶えよ。重大なる年なり。

信仰によつて生命は与えられん。生命は永劫なるものなり。

基督に従いて、己れの十字架を負え。然らば汝の身体は強健ならざるを得ず。

誠に実に神様、父なる神様、聖霊をしてこの小なる辰雄に宿らしめ給え。

カシオペアを仰ぎ瞻^みて、昔を偲ぶ。兄上は確かに僕に宿りて僕を守り給う。歡喜なり、

希望なり、感謝なり、祈祷なり。旭日昇天の勢を以て、神の栄光、顕われ給え。アーメン。

Likewise the Spirit also helpeth our infirmities :

For we know not what we should pray for us we ought :

But the Spirit itself maketh intercession for us

With groaning which cannot be uttered. — Romans.VIII.26 —

From My Brother in Heaven. Tomorrow, My Brother's Graceful Day

「²⁶斯くの^{ごとく}御霊も我らの弱を助けたまふ。我らは如何に祈るべきかを知

らざれども、御霊みづから言ひ難き歎をもて執成し給ふ。」(ロマ8・26)

天の兄上より。明日は兄上の恩寵の日。

○1924年1月22日 (火)

晴、満月。実に何と讚美してよいかわからない。実に好い天気である。マントも着ずに飛び出した。ああその山の姿よ、その木の姿よ、畠の様よ。兄上の今年最初の御命日である。この自然を見得るこのよき眼を有てる僕の幸なることよ。不足を言うなかれ。慾を出すな。母上を思え。涙ならずや。

ああ、神様、神様、どうして母上からその眼をとり給いしぞ。神様よ、聖旨ならば願わくは、母上の肉眼をも開き給え。この天然を見るべき眼を再び母上に与え給え。僕の靈魂は消え入るばかりであります。どうか、聞き給え、神様、神様、神様。僕は片眼となるとも、母上の一眼を開かれんことをお願い致します。神様、神様、母上のあの御不自由を思うと、僕の胸



は一杯になります。どうした聖旨でしょうと。母様を懷う情にかられて泣き叫びたくなるのでございます。十字架を負いにし母様なればこそ。ああ、僕もまた母様にならい、亡き兄上にならい、十字架を負いて主に従わん。

天国は我等が永遠の住家であります。母様も両兄も姉上も僕も、ついには永遠に離るることなく、天国に集まることでしょう。そのためには何も要りません。ただ、この歓喜ありて総ては幸であります。感謝でございます。主よ、主よ、救主よ、導き給え。アーメン。満月が輝いて今夜を祝してくれます。兄上よ、天国に安かれ。

○1924年1月23日 (水)

晴、烈風。非常な風である。砂塵を吹きまくって不快言わん方なしである。ことに教室の不潔なること慨嘆に堪えない。これが官立学校の教室かと思われる。

21才、伸びん伸びんとしているこの身体、伸ばせ伸ばせ。天の恵は大なり。今に及んで伸ばさざれば機なし。実に実に好機、逸すべからず。偉大なる体軀の基は今にあり。すべてから思いをはなして、ひたすら只管、大となれ。

○1924年1月24日 (木)

晴、寒し。帰寮後、入浴。午後5時、出掛ける。内村先生が「猛獸狩」は益になる、見る価値があると、その『聖書の研究』に書かれた。それを見たいと思っていたが、夢かと思われるほど不思議に水戸の活動写真館に来たのだ。それで今日は一年ぶり位で活動写真を見に行ったのである。入館したのは5時半であった。早すぎた。待たされた。おまけにその前置きの2、3の活動のつまらぬのに更に退屈させられた。学術上、科学上のものではない活動は見るに若かずである。喜劇はまあ無害であるが。

「猛獸狩」全十巻は実に面白く有益であった。ケープタウン海辺の捕鯨、ペンギンの棲息実況、ダイヤモンド発掘実況。有ゆるカモシカ、はげたか、しまうま、ゼブラ、ジラフ、土人の踊り、獅子、象、猩々、きつね、河馬、犀、毒蛇、さる、野牛、つる、……その種に於て実に多種珍奇なものばかり。その野生の実況を捕えて、カメラに入れたのであるから、実に貴重なるものである。その苦心たるや誠に非常なものと言わざるべからずである。これによってアフリカの野獣の實際生活を目撃し得たる感を得て実に嬉しく、且つこんな映画を見たことは感謝である。測らざりき。

同じ50銭もかく有益に使われるを思えば、金は使い方如何で、如何にも出来ると思った。「そばや」などへ通りがかりの出来心でとびこんで、ひよつと使ってしまうバカ者の金の使い方を思うとなさけなくなる。そして彼等は、金がない金がない、貸してくれ貸してくれと云う。質屋に足を運ぶ学生が本当に居るのであるからあきれる。彼等と一つの教場で学問をしているかと思うと学校もほとほと厭になる。コートブリッジ、オックスフォード、イー



トン、ハーバードなどの学生生活が羨ましくある。

就床11時半。——帰京車中にて——

『死の猛獣狩十巻。幾丈の巨木を踏み蹂りつつ凄まじき咆哮と共に猛進して来る怖るべきアフリカ野象の大量。疾走中の自動車に突進する、我等が想像も能わざる怪物。H.A.Snow氏及びSydney Snow氏は1919年アフリカに向かって桑港〔サンフランシスコ〕を出帆した。人跡未踏の最も暗黒なるアフリカ内地に苦熱と危険とあらゆる辛酸を冒して今まで成功する事の困難であった熱帯動物の自然生活そのものを撮影するは学会を裨益すること僅少でないもので其の目的を果たす庸とし、また加州オークランド博物館のために珍奇なる動物を収蒐して持ち帰るためであった。為に一行は八千哩の長途二ヶ年間に亘って踏破した。其中六千哩はアフリカ内部の土地であった。氏の苦心は驚くべきもので麒麟の撮影に三ヶ月を要し時には獯猛なる象の襲撃を受け、名状すべからざるものであった。其の得難き経験は即ち得難き映画となり之までアフリカへ遠征せるポール・レーテ氏及びルースヴェルト氏並びにエーダレー氏以上の大成功を収めて貴重なる他に未だなき本映画となつたのである。』

○1924年1月25日(金)

晴。快晴の好天気。四郎ちゃんと二人で朝食をゆつくりすませて、10時の汽車で東京へ帰った。静かな春の日の様である。ステイムが通っていて、のぼせる位である。2時、上野に着いた。それから直ちにお墓詣りをした。兄様の前にお祈りした。お墓の石も引き続く近頃の天候でからからに乾いている。それで水をかけて上げたときは、僕の心も潤った。1924年より僕が一新する様にお祈りした。

○1924年1月26日(土)

晴。摂政宮御成婚式の佳日。学校では式があつたのである。午前、丸の中へ行つた。九段で(向山堂)『神癒』アンドリユー・ミューレー著と『聖書の研究』1月号と11月号とを買った。お昼は、サンドイッチと洋食の折詰とで戴いた。実に美味しかった。午後から母上様をお伴れして山本へ行つた。母上様は年始というわけである。僕の帰るのを待つて居られたのである。義坊、隆坊、富美ちゃん、よく母上様に馴れて面白そうに遊んだ。桃太郎の話をしてやった。歌もうたつてきかせた。お夕飯は姉上の心尽くしの饗餐に与つた。牡蠣のおつゆは殊に美味しかった。9時頃暇乞いをして帰った。母上も僕も冷たい風がすきで人の寒い寒いと云う風を、気持がよいと云つて吹かれながら帰った。帰宅してみると兄上が宇都宮から帰つて居られた。入浴して就床した。よい心地であつた。

佳き日は、めでたく終つて本当に慶賀の御事であつた。両殿下万歳と心から申し上げるのである。純なる日本国民は双手を挙げて心からお祝い申し上げる。このとき、もののもの



しき警戒をなさしめる売国不忠の民は何物だ。実に慨嘆に堪えぬ次第である。

○1924年1月27日 (日)

初雪。起きて見るとこは如何。一面の銀世界である。快哉！を叫んだ。僕は雪の子である。雪が大好である。雪抛げをやった。午後から、一人飛びだして代々木の原へ出掛けた。原はじつに奇麗で目が醒めた。ひろい原のはじから端まで歩き廻った。随分歩いた。雪を木にぶつけて遊んだ。子供を相手に遊んだ。すべつてもみた。雪の上にくらぐらぐらもみた。口に含んでその天然の味に舌鼓をも打った。頭の上にも載せた。顔にも塗った。全身はぽかぽかと暖かいので、この雪とかくして戯れるのが実によい気持であつた。飛行機が飛んで来て、原に降りた。そしてまた西方夕陽を追って飛び去った。壮快であつた。日が西方の山へ春くとき、純白の雪の上に僕はドッカと腰を卸して、その美に見凝っていた。いっしかその美と崇高に打たれて、僕の頭は垂れて祈祷にとかわった。白雪も銀色にキラキラと輝いて四囲の情景は何とも云えない清浄さである。

今日のこの気持は忘れられない。入浴して、夕飯を戴いた。かきなべは実に美味しい。母上は今日、斎藤さんに伴れられて「お能」を見に行かれた。兄上は宇都宮へ帰られた。

○1924年1月28日 (月)

晴。僕の罪を赦して下さい。僕は神癒に与るあずかのである。感謝すべきことである。僕は新生命に生きんとする。恵まれたる日である。僕は主の強き僕であらねばならぬ。内に宿り給う聖霊の御声に従って強く歩もう。それで、僕の心身の癒されることは確かである。神よ、願わくは強く歩ましめ給え。信あらしめ給え。実あらしめ給え。アーメン。夜10時。

○1924年1月29日 (火)

晴。母上様と色々、宗教のお話をした。内村先生の書を読んで、新しき生命を注がれた大手町の講演が思い出されていつも好感（これでは失礼）感謝である。午後、九段の向山堂に『聖書の研究』10月号を買いに行った。『宗教座談』も求めて来た。読みたい本はこれで揃った。母上様から御親切なお言葉を賜って、僕は感泣した。かくまで僕の健康を祈り賜う母上にお答え出来ない僕の如何に罪深きことなるかをしみじみと感じて、胸は一杯になった。しかし僕の罪をすっかり打ち明けて、母上様にお詫びをして僕も心が落ちついた。

御恵を与えられるのに、それに叛く様なことをして、その御恵を無にする様なことがあつてはならない。本当である。僕の今までの身体に対する心得のあやまっていたことはよく知っている。しかも実行の出来なかつたのが、愚かなる——不信仰なる——僕であつたのである。

今日は本当に有難い日であつた。母上の情の暖かさ！これを何にたとえることが出来



ようか。葉湯のわかしぞめである。家のお風呂に葉湯は生まれて初めてである。温まる。母上に背中を流して戴く。また流してさし上げる。母上のよく太られている御身体を見て、実に嬉しくある。感謝の至りである。健康の快復と共に御眼の蘇生よみがえらんことを祈り願ひ奉る。僕の最も願ひはこの一事を擱いて他にない。お座敷で母上と並んでやすむ。

○1924年1月30日 (水)

晴。起床8時。母上と共にパンの朝食を静かに戴く。兄上の御写真の前で母上と共に祈りする。次に母上が祈つて下さった。アーメンとお答える僕の心は一杯であった。硬き握手を二度交わして出掛けた。実によい天気である。車中は一人、『聖書の研究』を読み耽った。時々、外の天然を眺めて、何処にも天恵のあふるを見て、心は豊かであった。木も草も鳥も土も水も皆、僕の友であった。

水戸で下車4時。寮まで歩いた。丁度、お風呂が沸いていて有難かった。夜は聖書を繙いて、心を落ちつかせて戴いた。僕は神に依つてのみ強きものである。人によつてちつとも動かぬ力は、どうしても内なる神によりのみ生ずるものである事を深く悟らせて戴いた。

神癒は来る。感謝して享けよ。而して強く立て。勇んで働け。

何でも主にありてなすことは善であり、よき実であり、天国への実である。

○1924年1月31日 (木)

快晴。

「されど我名をおそるる汝等には義の日いでて昇らん。その翼には医す能をそ

なえん」(マラキ4・2)

暖かいこと春の様である。マントは勿論、シャツもズボンもうすくせざるを得なかった。疲労を覚えたのですぐ帰った。入浴した。

信仰に歩むことの如何に必要なこと——必要ではない——それでは僕が生きているのではない。主にありてのみ僕は在るのである。心が落ち着いた。心眼を開いて戴いた。母上に申し訳けないことが益々明らかである。

御恵を自ら享けていなかったこと実に大であった。その損害たるや何にも優りて大であったが、それを解らせて戴いて、自分はまた全然有難い立場に立たせられたのである。しかし、僕の身体が強健にならんとするには、*more haste, less speed!*「急ぐほど、ゆっくりと。急がば回れ」である。

1月の最終の日が来た。1924年の第1の月が去ろうとしている。1ヶ月かかってやつと御恵の端緒を攫つかみ得た。自分の罪を告白すると共にこのことを深く感謝し奉る。さらば神よ、願わくは、見棄て給うことなく、益々御恵を垂れ給わんことを。

